

旧稀集年表

番号	年号	年	西暦	季節	月	日	記事	挿絵				
1	寛政	4	1792	秋	7		この年、誕生する。					
2							島原雲仙、噴火する。					
3		9	1797				信濃善光寺の出開帳が龍宮寺で行われる。					
4		10	1798				松囃子。中島町は豊年丸大船をこしらえる。					
5							京都大仏、落雷により焼失する。					
6							「あずきどき」という化け物、噂になる。天保頃には収束する。					
7							浜小路町松葉屋何某、「唐風呂」というサウナの営業を開始する。享和末年頃薪高騰の影響で閉店する。					
8		11	1799				松囃子。今年の飾りは人形の造りが凝っている。					
9							放生会。暮れ頃より博打店が多数出店する。					
10							闇魔出店。松原西入口から一町程松原へ出す。					
11				夏			箱崎にて角力興行。					
12					冬		堅町で芝居興行。家中小若頭と近隣の住人五人が喧嘩をする。					
13		12	1800	夏	5		湯町にて上方役者芝居興行。大好評に付、博多松原茶屋脇で再び興行。					
14							西町浜にて角力興行。大当たり。					
15	享和	1	1801				奈良屋番宗湛屋敷にて芝居興行。上方役者勢揃いで舞台も評判高く大当たりする。					
16						10		中洲にて角力興行。この時、掛町で力士同士の喧嘩有り。九紋龍と手柄山が双方の弟子を交えて大乱闘をする。	○			
17								直方多賀の祭礼で、きも蔵というのぞき師、香具師と口論になり、香具師を出刃包丁できも蔵に殴る。きも蔵は姫島へ流罪になるも、後に脱出し、行方知れずとなる。				
18				冬			浜口中裏地にて芝居興行。大当たり。					
19						「円行」という黒犬、夜な夜な現れ人々を襲う。	○					
20		2	1802	春				太宰府九〇〇年忌。能興行、その他、芝居・見せ物多数。観世音寺でも開帳有り。				
21								小倉犬甘兵庫騒動。				
22								鞍手郡金丸村又三という一〇二才の老人、犬鳴山の登頂に成功し、福岡城下までやってくる。				
25								福岡・博多両市中より双林塔を太宰府へ奉納する。				
26				3	19		水鏡天満宮での祭礼の折、カラスを食べる大グモが神社に住んでいるという噂が広まり騒ぎになる。					
23		夏					浜小路にて角力興行。大関は雷電。平岩と市の川が好取組。					
24							6	1	住吉宮、川端に木の鳥居完成。上棟式有り。			
27		3	1803	春			諸国はしか流行。中島町からも参官人が上京する。					
28				夏			松原茶屋端にて芝居興行。大当たり。					
29	秋					中洲にて角力興行。岩木山という力士は人気があったが相撲嫌いで風流の道へ進む。その弟は雷山の座主となる。	○					
30	冬					片土居町称名寺にて芝居興行。大当たり。						
32	1	1804	夏	4		香椎宮奉幣使下向する。街道筋は大いに賑わう。						
35				6	14	山笠に馬乗り乱入。馬、山笠に驚き大暴れする。けが人数知れず。						
34			秋	9	24		中島町より水鏡天満宮へ青銅の狛犬一組を奉納する。					
33							中島浜手裏に寛政年中に舟入が有った跡地へ蟬座会所を建てる。蟬座切手引替の為の木札の奪い合いが起きる。	○				
36						土居町紺屋市作の元で働いていた六〇過ぎの親父、染め物をしていたためか顔面を腫らす。	○					
37		2	1805				松囃子。花見の様子を飾りにする。					
45							1		掛町油屋にて薩摩から駆け落ちしてきた間男と女が先夫に襲われる。間男は死亡、先夫は捕らえられ牢死する。			
38										女性の振袖を見掛けなくなる。儉約がその理由。		
41										鯛町・洲崎の人々、大坂から行者が来たことをきっかけに、役行者を豊満山に奉納する。		
42							春			万行寺にて武丸正助一五〇年忌供養を行う。大いに賑わう。		
47										京都より二条家の名を騙り悪ねたりをする藤島という人物がやってくる。後、京都で死罪となる。		
39							夏	6	1		大水。中嶋両橋に「だぶす(樽)」を上げる。	
40							秋			7	18	大浜住居の藩の御金方、江戸にて不足が有り、斉藤様に預けられる。後に大嶋へ流罪となる。
43						櫛田神社で角力興行。久留米藩お抱えの大見崎や福岡西町出身の荒汐らが登場する。						
44					松原茶屋辺りで芝居興行。仮名手本忠臣蔵の五段目で猪が大暴れし場内大騒動となる。	◎						
46					この頃、一膳飯一人六〇文で料理の内容も詳しく書いたチラシが配られる。しかし、在郷の者はお断り、という但し書き付。							
48	3	1806	春			長崎にロシア船来航。大將名「レザノフ(レザノフ)」。前年に松前に来航し、白子の幸大夫らを連れてきた船とのこと。※実際は文化元年に長崎に来航						
49	3	1806	夏	6	11		唐津から来た男、福岡本町で刀を振り回して暴れる。濡衣塚辺りに潜むが、翌日篠栗で捕縛され、その後牢死する。					
50								日照。しかし、福岡城本丸の野村・久野様両御屋敷内は水の流れる場所が有り、見物人で賑わう。				
51								市小路下の山笠、赤壁を標題にする。向こうが透けて見える珍しい造り。	○			
52							15		山笠後に中嶋西橋で行われた酒宴の折、皆で殴った人物が家老黒田美作様の家来と判明し、大ごとになる。			
54	春					中川春吉六番町辺りに巨大水車完成。名島町重助がロシアの技術を学び造る。	○					
55									江戸永代橋落ち、老若男女多く死す。原因は武士が刀を振り回し、大騒ぎになったからとのこと。			
58									若杉山にて、縦四尺横三尺程の大きさの楓が見つかる。中国製のように珍しいので郡役所に届ける。			

53	4	1807	秋		榊田宮御神幸。				
56						藩財政窮乏により、万事御儉約が始まる。町人よりの上納銀多数ある。			
57						二日市より御家中への出奉公人、奪った脇差を那珂川に捨てる。その後捕まり裸で川中を捜索させられる。	○		
59						山方切手発行されるも、御切手掛りの林団治、柳町の女郎に入れ込み職務罷免される。			
60						紺屋九平手代徳波郡阿恵村三五郎、色事上手で御家中某様の後室と駆け落ちする。			
61						福岡・博多両市中の商人、大坂へ出て相場に手を出し成功する者あり。			
63						中島町唐物問屋井桁屋磯五郎、楽天家として知られる。季節の飾り物は時期が過ぎててもかざりっぱなし。庭に竹の子が生えても気にしない。	○		
64			5	1808	春	1	松雛子。住吉踊り。今年の通り者はおもしろくない。		
65								大坂の大盗人新吉、女房と辻堂に来て盗みを働く。後に大坂で死罪を申し付けられる。	
66					秋	8	14	長崎にイギリス海賊船来航。盗みを働き逃走。立山御奉行(長崎奉行松平康英)様切腹。福岡へは翌日に知らせが来る。	
62					この頃、袖無し羽織を身につけたおしゃれな若衆が増え、芝居見物の場などで評判になる。	○			
67	6	1809	春	3	久留米高良山開帳。大坂から芸人が多数来る。小竹栄五郎という曲持芸人大当たり。	○			
68						山家で化け物出る。火を扱い味噌を荒らす。「だつ」と名付け、藩の役人が捕縛に出るも見つからず。			
69			夏	7	20	唐人町でにわか大賑わい。悪たれにわか度が過ぎて家中隠居倉鉢何某に一刀のもとに切られる。			
70						横町の八百屋半七、諸品を扱い大繁盛。大坂以西では二つと無い店との評判。			
71					松本何某様若殿と宮本何某様娘が駆け落ちするも捕まる。後、若殿は宮本家を襲い、娘を斬り殺し、大島へ流罪となる。				
72	7	1810	春		秋月御殿様のお子様、郡家の養子となるも失踪し、筑後国松崎宿で捕まる。六五〇〇石から二五〇〇石へ減知となる。	○			
73						大西松原片原町亀井道載(南冥)、家に火を付けて自害する。享年八八歳。※実際は七二歳で没している			
74						江戸より測量方役人がやってくる。聖福寺の宝物見物を願うも、態度が権柄であったため、仙厓和尚に出直してくるようと言われる。※文化九年の間違いか			
75			夏	5		ほうき星現る。測量方役人、望遠鏡等を用いてこれを調査する。星の長さは八〇〇余里あるとのこと。※文化九年の間違いか	○		
76						榊田宮社家方、博多津中に対しての夏祈禱を始める。			
77	文化		秋		榊田社内で植木役者興行。女形のカツラが取れて観客大笑い。	○			
78	8	1811	春		宝満山峯入。榊田神社に宿泊後、福岡城、早良郡へと進む。				
79						御国殿様備前守様(黒田齊清)、初めての御国入り。大行列となる。			
80					4	5	脇坂淡路守様(安董、寺社奉行)、対馬へ行く途中博多で一泊する。宿泊所は上大賀宅。市中は大賑わい。		
81				夏			林大学頭(述斎)が対馬から帰国する途中、その接待役を勤めた高浜様という役人を貶める悪者が登場し、再三邪魔をする。		
82				秋			福岡西町浜にて角力興行。格別大当たりはせず。		
83			冬		福岡警固社内で能芝居。大当たりする。				
84			夏		徳波郡平恒村大庄屋諸平、有能な人物だったが、百姓らに憎まれ打ちこわしに遭う。				
85	9	1812			松雛子。今年の台は御神鏡に太神楽の御祓い。殊の外賑やかな模様。				
86			春			鞍手郡直方町大庄屋庄野与四右衛門宅を襲おうと一〇〇〇人の百姓が群集するが、話し合いにより解決する。			
87						久留米鉄屋正兵衛、大山師として知られるが、大坂にて様々事業を成功させ、後に国元に戻り藩に抱えられる。	○		
88			冬		赤坂米屋喜右衛門、捕鯨業を思い立ち、人を集め練習を行う。見物人多数。				
89					社家町赤根屋と御船方御役人藤田長助殿が口論となり、町奉行郡九郎右衛門殿が仲介する。				
90	10	1813	春		京都より来た田村歌丸、神道口談を榊田宮社前にて興行する。大当たり。				
91				1	5	大名町で御馬乗初めの折、久野治左衛門様と御無足組何某とが刀を取り違える。治左衛門様はこれを恥じて其の夜切腹する。			
92					オランダ人、象を献上するが日本側はこれを断る。舟橋を造り脇に幕を張り隠れて乗船させるが、鳴き声は長崎中に響き渡る。				
93	11	1814			松雛子。今年は茶摘み図の台。殊の外よろしい。				
94			春	3		鞍手郡直方町にて角力興行。大当たり。			
95				6	11	中島町の酒に酔った若者一〇人、悪口を言った人物と勘違いして吉田六郎太夫様の下男をさんざんに殴ってしまう。			
96				7	7	大風が吹く。			
97					御上より御切手出る。長崎上田何某という者。偽切手をつくった廉で打ち首となる。				
98	12	1815			松雛子。飾りの曳き台は三番叟。格別よろしからず。				
99				1	15	松雛子にて唐人町の若者、釜屋番の通り者に悪口を言うも反撃される。後、町を挙げて手当たり次第に仕返しする大騒動に発展する。	○		
100				夏	6	27	春吉六番町足軽何某女房、御手廻何某と密通する。足軽何某は手廻を斬り殺し、女房も後に牢内で手討ちにされる。		
101							大坂より竹本座が来る。博多での興行はつまらなかったが、宮崎蓮城坊では大当たりする。鞍手植木でも大当たりする。		
102							箱崎網屋町にて芥屋汐井様御汐井について持ち歩く親父あり。後に土御門家に取り入り木津市正と名乗る。繁盛するが行き過ぎて藩から咎めを受ける。		
103				夏	7	18	那珂川洲賀にて角力興行あり。大関は島原の玉垣と筑前の鳳で、大当たりする。		
104							土居町角米屋市郎右衛門たいへん繁盛する。一年で二百俵余りは鼠に喰われているという噂。		
105			冬	12	大関、鳳谷五郎、宗像辺りで博打に大負けする。ほおかむりして鼻水を流しながら馬に乗る姿はとても哀れ。	○			
106				11	26	福岡野村新右衛門様浜屋敷より出火。大火事となる。			

107				松囃子。子ども達は鶴の笠をかぶる。今年の装いはおもしろくない。	
108		春		「負け博打うち」の甚五、住吉宮に詳しくあったためか、宮崎大炊守と改名し、土分に取り立てられる。	○
109	13	1816		宮崎宮の座主坊と神主、今後は放生会で別々に祈祷することになる。	
110			5	晴天なのに豆が降る。人々「豊年豆」と言う。	
111		冬		櫛田宮社内にて芝居興行。大当たり。	
112				松囃子。春駒おどり。格別の事なし。	
113		春		海元寺に京都より錦織下る。仏像などが織ってあり見物人も多い。	
114				箱崎高灯籠立つ。宗湛町松屋三右衛門ら出資人に名を連ねる。	○
115				大豊作。特に鞍手郡水原村・宮田村・中山村辺りが豊作。	
116				川端町酢屋九郎右衛門の次男、商売うまくいかず、諸所の役人らの名を騙り人々をだます。後に捕縛され牢死する。	
117	14	1817	冬	川端町にて芝居興行。「雁金五人男」を上演中、演出で喧嘩がある。石釜の力士鈴鹿野、本当の喧嘩と勘違いして止めに入る。	
120				釜屋番長右衛門、以前付き合っていた女性の仕打ちを受け、正月、家中に糞を塗られる。	
121		春		洲崎町下魚屋何某、柳町大和屋藤川と言う女郎と寝るも、頓死する。	
122				鞍手郡の大庄屋四人、退身を命じられる。	
123		夏		穂波郡横田村百姓長助、女房と密通した親父を殺す。後に露見し、比恵川端にて磔刑に処される。女房は小呂島に流罪となる。	○
118				松囃子。陣笠をかぶり乗馬の行列。たいへん評判が良い。	○
119	1	1818		文政二分金の通用が始まる。	○
124				遠州浜松の殿様(井上正甫、幕府奏者番)、百姓の女房に手を出したことが露見し、国替を命じられる。浜松・棚倉・唐津で三方領知替をする。	
126				豊作。米一俵一貫八〇〇文。	
127		春		夜須郡浅井弥四郎、孝行者として藩に賞されるも、酒席で拝領の包みを紛失する。	
128				辻堂辺りの出身の浄土宗蘭重和尚御下り。諸寺にて説法有り。	
129				松原閻魔堂に来ていた近江からの巡礼者、大病を患い死ぬ。遺品から木像が見つかり、仙厓和尚の鑑定によれば親鸞ゆかりの像とのこと。海元寺の宝物となる。	
130				この頃市中の人々言う。一は川端、二は茶茶、三は流生、四は亀井云々。	
131				店屋町松永徳兵衛(子登)、捨て子二〇人ほど育てるなど、たいへん繁栄する。しかし、後に家が傾き家財道具を競売に掛ける。長者の品ということもあり、大人気となり、四〇〇両程売り上げる。	
132			5	福岡橋口町水鏡天満宮御普請につき遷座。中島町の夏祭りとの重なり大変賑わう。	
133				松囃子。富士巻狩陣屋の様子を台にする。行列は狩りの様子を再現する。その他美々しく揃う。	
134				豊作。米一俵一貫六八〇文。	
135		夏		青柳宿馬方、箱崎へ送る長崎御用金を途中で持ち逃げするが捕縛され牢死する。	
136			5	中間町大工忠平、柳町にて家中山内御下男と喧嘩。脇差で下男を刺殺し、打首となる。	
137		夏		市小路浜にて角力興行。殊の外大当たり。	
138			7 14	雹が降る。氷のつぶの大きさは重さにして六匁(=二二.五グラム)位。珍しいことである。	
139				豊作。米一俵一貫七〇〇文。	
140				松囃子。台に放れ駒を作る。格別おもしろからず。	
141		春		鍛冶町にて、手すまとり(手品師か)と菓売りが喧嘩し、菓売りが小脇差で刺殺される。手すまとりは後に牢死する。	
142			8 2	御真間様(黒田治之夫人瑠津院か)、御死去。三日戸閉め、一七日漁止めとなるも、中島町秤屋久右衛門、鳥を捕まえ、役所の詮議を受ける。	○
143				市小路町浜にて角力興行。内容はよかったが、不当りとなる。力士の中に酒乱者がいて、一騒動起きる。	
144			9 1	宗像郡田嶋社御祭礼神事能有り。能太夫は弥内という者が勤め、近村の弟子らも舞う。転倒者が出て皆大笑い。	○
146				豊作。米一俵一貫七〇〇文。	
147				松囃子。紋羽にて台にいなりを張り飾る。特に面白くはない。	
148		春		松囃子。矢野安太夫様の指図で簡略化される。とても寂しい様子である。	
149				御仕官村上三太夫、大組伊丹五郎左衛門方小姓を殺し刀を盗み古物商に売る。後、僧体になり逃亡するも肥前との国境で捕縛される。	○
150		春		オランダ人、ラクダを長崎の女郎に贈る。子の養育費代わりにとのこと。大坂に送るが、金にならず、江戸まで行き、そこで死ぬ。	
151			8	長政公二〇〇年忌。崇福寺にて法事。仙厓和尚他諸寺の僧が参列する。城内下屋敷にて御能拝見有り。	○
152		冬		郡浦の大家衆、諸方に貸していた借金を帳消しにする。その後、脇差の所持等が許可される。	
153				松囃子。両国橋涼み川船「川一丸」を台に作る。	
154		春		殿様痲瘡を患う。各所からお見舞いの献上品有り。町からは鉢植えの紅梅や書画、村からは鯉・鶴・山芋・野菜の類が献上される。	
155		春		柳町女郎町屋問屋廻り、これまでは木綿着にて廻っていたが、この春より衣装束に変更する。大変見栄えが良い。	
156		夏		中島町弥市女房、突然末の子を包丁で刺殺し、自身は井戸飛び込み自殺を図る。	
157				相模小田原の浅田鉄次郎兄弟、親の仇討ちをするという話が伝わる。本当の話だということ。※実際は兄が鉄蔵で弟が紋次郎。	
158				松囃子。棟上の様子を台に作る。大工の格好等をして餅を投げる。大変良い。	
159		春		二朱銀吹替。一朱金の通用が始まる。	
160		夏	6 26	川端上の番、米屋甚平方に質入れしてある大鋸を見立てて、材木を大鋸で引く人形を作る。	○
161		冬		遊行聖人、御下り。片土居町称名寺に滞留する。	○
162				松原若松屋に大坂者三人有り。大坂風流の茶屋に改装し、芸子三人を置く。たいへん大当たりする。	

163			冬		この頃、御足輕頭手附五人程にて毎晩市中を巡回するようになる。	
164					松囃子。大タコを作り台に載せる。行列は忠臣蔵七段目を見立てたもの。	
165			春	2	櫛田宮御普請にて御神幸御通行有り。	
166					薩摩栄翁(島津重豪)様、初めて福岡に御入り。本陣は大賀宅。	
167			春		分銅屋がやってくる。薩摩様御宿紙屋孫太郎宅へ一〇日余り逗留。後豊後屋忠右衛門宅に逗留。	
168					箱崎に一〇〇才の老人有り。翌年死す。	
169				7	南方の空にほうき星が出る。	
170		8			浜口町辺りに住む針医師筑紫梅仙弟子の仙古、年齢は二八、九歳で背丈は三尺余り。医術にすぐれる。	○
171					横町下魚屋文右衛門、三八才位で背丈は三尺余り。天保一〇年頃死す。	○
172			冬		薬院上人橋にて井上何某様御次男、小僧を化け狸と間違え切り殺す。後出家し、秋月の某寺の住職となる。	
173			夏		「シイプリ(シーボルト)」、長崎に来航する。大殿様(黒田斉清)によればロシア人に間違いないとのこと。帰国時に日本地図を持ち出したことが露見し、関係者が処罰される。後に来航したオランダ人から、かの者は帰国後処罰した、として塩漬の首が届く。	
174			春		善照寺裏の地中から猫掻き茶碗が大量に掘り出される。四斗樽にして四杯程。綺麗に接いで売る者もいる。	○
175					この頃、屋根の上に梅の枝を挿した竹筒を置くことが流行する。どうい理由かは分からない。	○
176				6 4	雷雨。博多から枳形御門にかけて二〇ヶ所ほど雷が落ちる。雨は篠のよう。近來珍しく恐ろしい雷雨である。	
177			夏		名島村の若者、福岡から来た山伏が同村の娘と懇ろにしているのを嫉み、この山伏を殺す。首謀者は打ち首、三名が島流し。	
178			秋		若殿美濃守様(黒田長博)、初入国。行列は御登りと違わず賑やかな様子。	◎
179			春	3	太宰府九二五年忌。たいへん賑わう。江戸から来た力持ちの芸人が大当たりする。	
180			夏		中洲にて角力興行。大当たり。	
181					学者の江上源蔵(荅洲)、この年死す。	
182					誹諧師の自由庵瓢風(大野剽風)、この年死す。	
183			冬		対馬より虎二匹来る。鯛町下対馬屋吉次郎裏に竹で檻を作り見せ物にする。まるで猫のよう。生きた鳥を捕らえたりする。	◎
184					那珂郡比恵村百姓両市中に馬を引いて来る。賢い人なので図に記す。	○
185			冬	10	晴天が続く。野菜の生育にも大きく影響する。	
186					松囃子。大賑わいとなる。若殿様(長博)にとっては初めてのこと。	
187				1 18	真冬にはあり得ない暖かさになり、大根の花が咲く。秋の台風の前触れだったか。	
188			春	1	松囃子にて死人出る。今年は大変な賑わいで刀の鞘や抜き身を落とす者も多い。両市中では宿が取れず、箱崎、姪浜、板付辺りで泊まる者もいる。	
189			春		薬院龍華院向かいで能芝居興行有り。大当たりする。	
190				4	地震が度々起こる。去冬以来気候が不安定である。	
191				6 1	雨激しく降る。大水にて中島両橋共に「だぶす(樽)」を載せる。流行病も発生し、死ぬ者も多い。	
192			秋	8 9	大南風が起こる。風雨に火事も加わり、死者は数千人に及ぶ。	◎
193				8 24	大南風又々起こる。半時程静まるが再び風雨が強まる。浜手の者は、博多は櫛田神社、万行寺、東長寺辺りに、福岡は城内の黒田播磨様らの御屋敷に逃げ込む。城内に避難した者へは粥が与えられたとのこと。死者は今回もおびただしい。	◎
194					この年、豊作。	
195			春		野村新右衛門様、聖福寺丹玄和尚と寺補修の件で喧嘩。野村家はこれをきっかけに菩提寺を聖福寺から安国寺に替える。	
196			春		この頃入籠中の盗人、銀札の件で入牢した富商から金を得、肥を汲み取りに来た百姓からカミノリや脚絆を買い、脱獄する。	
197					唐人町井上傍、身長四尺余り。尾形洞谷に弟子入りし画家になり、絵馬や襖絵をよくしたが、この年、息子と心中する。	○
198					柳町近江屋に男装した女郎がやってくる。名は菊枝。たいへん器量が良い。	○
199				8	放生会にて、三尺余りの鉄棒を呑み込み上から槌で打つ見せ物有り。種も仕掛けも無い芸とはこのことである。	
200	幕末				三月頃に福岡から宰府往還を遠乗する者有り。	◎
201	元治	1		7 20	博多小山町米屋惣右衛門、銀札相場を操作したことが恨まれたか、侍七、八人に殺害され、翌朝、黒門橋に首を晒される。	○
202					牧市内、才知勝れた人で御右筆御用部屋勤めとなり、のち家老衆の御相談相手になったが、勤王派に殺害される。	○
203					この年の夏頃より、閉門や切腹を命じられる家中の人々が増え始める。	
204	慶応	1			加藤司書、切腹場にて辞世の句を詠む。	◎
205		2			黒田美作殿、長州より小倉へ軍勢が上陸したとの情報を受け、中国端警備の為、出兵する。	◎
206	幕末				(旧藩主御下ノ屋鋪松囃子御門入の図)	◎
207	明治				(福岡の変首謀者の辞世)	

番号は旧稀集に登場する順序を示す。おおよそ掲載順通りに配列しているが、一部入れ替えている部分もある。／※以下の文章は年表作成者による注である。／挿絵欄の◎は見開き程度の、○は小さな挿絵を意味する。